

7. 飛津遺跡

所 在 地 須玉町東向字飛津600番地外

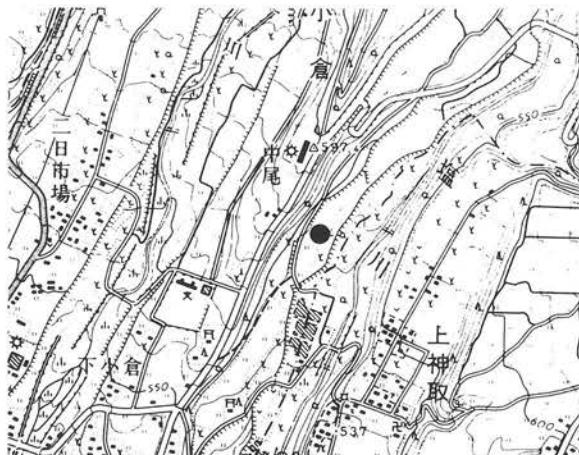
調査原因 県営圃場整備事業

調査期間 1999年5月11日～10月20日

調査面積 20,000m²

調査主体 須玉町教育委員会

担当者 山路恭之助



本遺跡は、平成10年度に発掘調査が終了した第2次東向長坂遺跡の南西に隣接し、塩川右岸の中位と低位河岸段丘上に占地し、標高は北端で534m、南端で519mが測られる。周辺の遺跡は、塩川左岸の中位段丘上の傾斜地で同町小池平字下平から、縄文時代中期末の下平遺跡が、茅ヶ岳西麓から塩川へ注ぐ小河川を境にする明野村上神取からも同時期の集落址諏訪原遺跡がある。前述の長坂遺跡からは、縄文時代中期末から後期中葉にかけての多量の土器片が出土し、遺構では、平安時代と時期不明の竪穴遺構を含め15軒の遺構が確認されている。

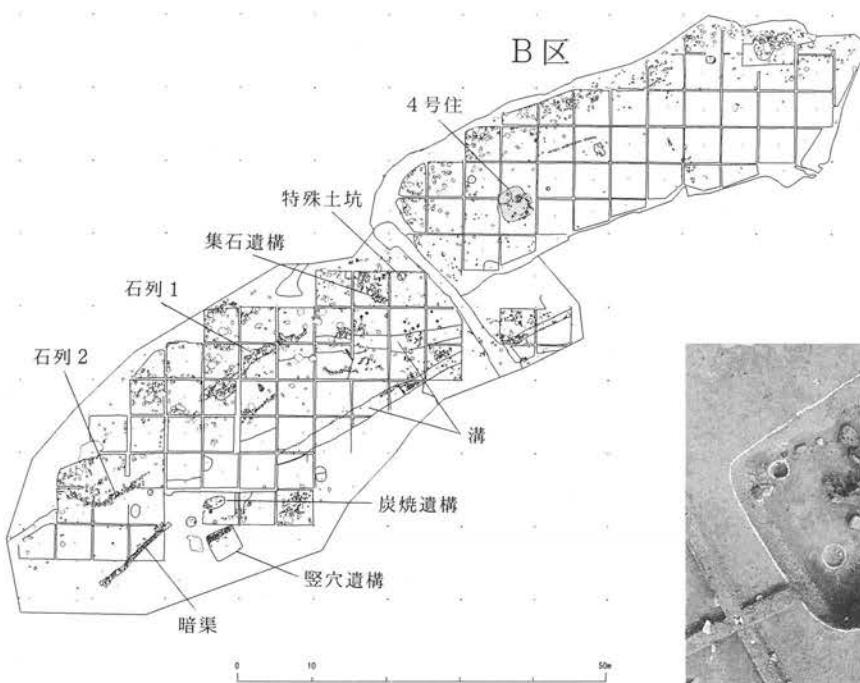
飛津遺跡から検出された遺構は、中位河岸段丘上（A区）から、田普請によって壁を削平された住居址で、石囲炉と約6mの同心円状に柱穴が穿かれている縄文時代晚期の土器片、耳栓、石鎚を伴出した遺構のほか、10世紀から11世紀に比定される平安時代の焼失住居址3軒と炭焼遺構、低位河岸段丘上（B区）からは、同代の焼失住居址1軒とカマド、柱穴など内部施設を伴わない竪穴遺構1軒、石棒を伴う集石遺構1基、特殊土壙を含む土壙数基、時期不明の炭焼遺構1、溝2本、石列2と暗渠1が検出された。

低位段丘下（B区）で検出された石列（約40m）の周辺の堆積土層は4層からなり、層厚は1.2mから1.4mあって砂と礫を含む最下層の灰褐色土から縄文時代晚期の大洞、安行式に比定される壺、鉢などの破片のほか、粗製深鉢片などが多量出土した。加曾利B式注口土器や後期の深鉢片が、ほぼ同じ層厚の最下層の巨石と砂礫まじりの灰褐色土から出土した第2次長坂遺跡とは、中位河岸段丘が両遺跡の間に突出しているといえ、300mを割る距離にある。

今後、中位段丘上と低位段丘上の遺構を他地域と比較検討し、両遺跡から大量に出土した遺物がはっきり後期と晩期に別れる事例や、急崖下の河岸段丘上に起きうる台地の崩落、土石流を伴う川の氾濫による集落の埋没あるいは生活用具（土器）の流失の事例を調べたい。



写真1 集石遺構



飛津遺跡全体図



写真2 1号住



写真3 A区調査風景



写真4 B区調査風景